The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	二つのデザイン個展を見て
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 1963, 2, p. 91-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52449
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

二つのデザイン個展を見て

1963年の夏は，期せずして，意匠学会の委員であり，関西デザイン界のベテランのお二方の個展が開かれた。美術の個展は，よくみかけるものであるが，デザインの個展は，グラフィックの分野といえども，まだ稀にしか催されることがない。しかるに時を接して，しかも同じ学会の委員が二人，大阪と京都で個展を開かれたことは，将に珍らしいことである。

この個展は，7月22日から8月4日まで，大阪東光画廊に於ける早川良雄氏のそれと，8月1日から8月5日まで，京都，京都府ギャラリーに於ける重成基氏のそれである。

早川氏の個展は，氏の数年来の作品中から特に選ばれた十数点を陳べられたものであり，それ等は，すべて何かの媒体を通じて，我々に，或はまた世界中の人々の目にふれたものばかりである。いわば，パブリシティの作品である。

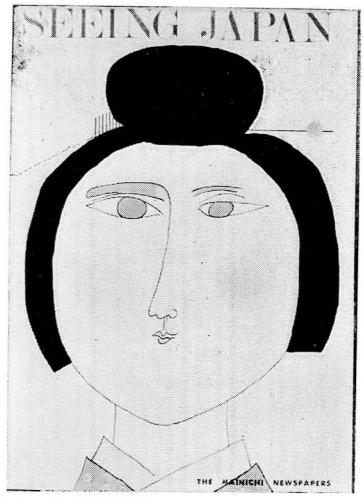
重成氏の個展は，すべて氏が今度の個展のために，或は（今度の個展を通じて，若いデザイナーの人々のために……筆者註）書き下されたオリジナルばかりである。

前者は，既に商業的な役目を果して来た作品であり。後者は今後，商業的役目を果そうとする人々に対する指針を与へてくれる作品である。

前者がグラフィックデザインとして完成されたものであるとすれば後者はエスキスである。また前者がプリント（印刷）されたものであるのに反し，後者は油絵の作品群である。かくの如く，全くちがったマチエールと全く異った目的を持ち，全く相反した様式を持ちながらも。この二つの個展には共通するところが多々あった。

早川良雄個展より

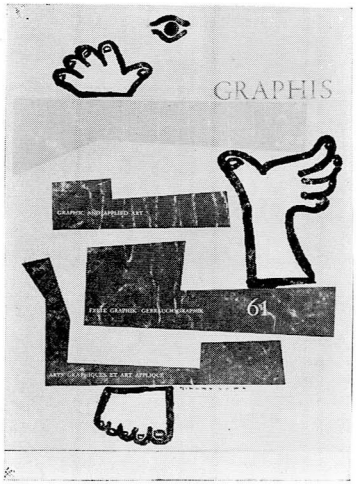
ポスター↑
「アイジョージ
リサイタル」



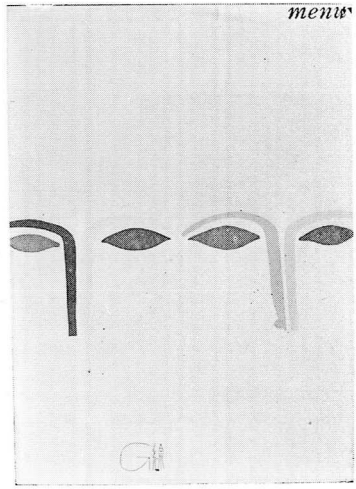
↑ポスター
「観光ニッポン」

会場風景→

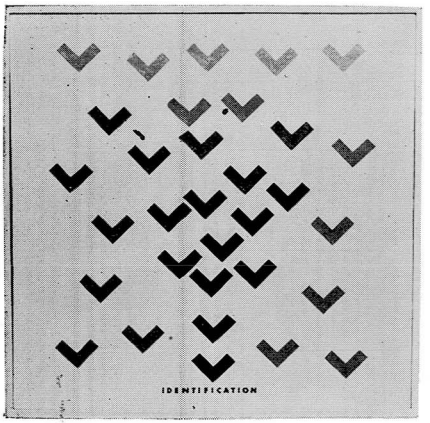
カバー
「グラフイス」↓

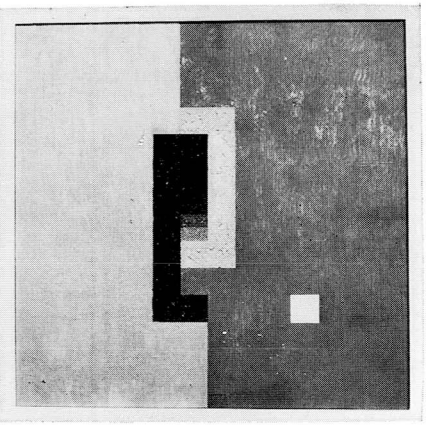


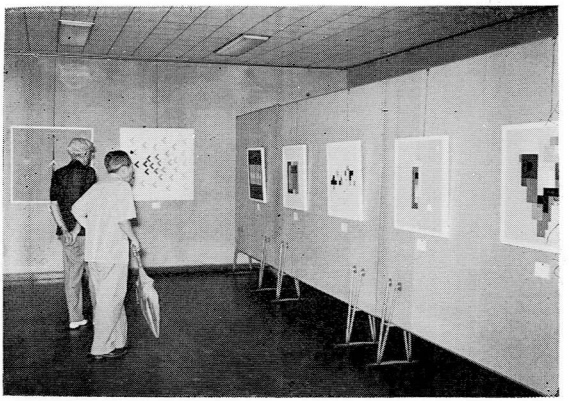
リーフレット
↓「G線メニュー」



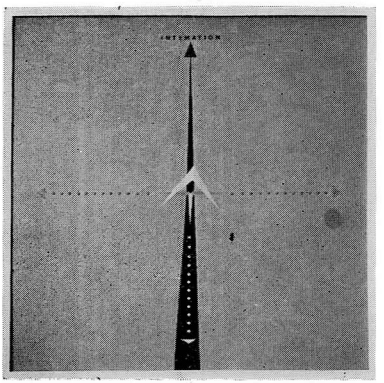
重成基個展より

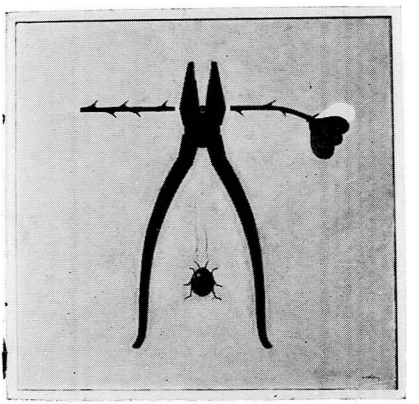






←会場風景





第一は，このことがほかの何事より強調したいことであるが，

第一は。スペキュタクル（見世物的）なデモンストレーションでないこと。

全く，近頃のグラフィックデザインの展覧会（敢て日宣美とか京産美とは云わない。）では，見世物の展開である。これは，何もグラフィックデザインに関する公募展だけではなく，純粋美術と称する団体の公募展でも，この傾向は強い。何百点かの中で，自分の作品を目につかせようとするために，見世物的演出をする気持も分らぬことはない。しかし，余りにもあわれな道化師的演技ではないか。

このお二方の個展にはそれがない。否，もう，そんな演技をする必要がなくなった良い御身分かも知れない。しかし，何れにしろ，これ等の個展を通して，そんな見世物が如何に無意味であるかを知らしめられたのである。

第二に，早川氏の作品といい，重成氏の試みといい。共に，いつまでも，新しい試みを続けられている点である。

早川氏は，観光日本（Seeing Japan）に見られるようなイラストレーションで，一分野を開いて了ったと言ってもいいのである。しかしそれに満足せず，東レの作品や，G線の作品のような試みを通って，アイジョージ・リサイタルのポスターに見られるような，イラストレーションが全くない様なポスターにまで自己のポエジイを昇華させようと努力されている。

一方，重成氏は関西デザイン界のベテランとも云える存在にも拘わらず，全く基礎的な試みともいえる形体の組み合せや，色調の配合のエスキスを，それも，氏独得のセンサイな筆徴で描かれている。中には最近話題となっているポップ・アートのような作品さえも見られる。将に万年青年の面目躍如たる所が見られるのでもある。

この二つの個展は，斯様に芸術（敢て芸術といいたい）は，自分との闘いであり，たゆまざる自己修練の連続であるのである。ということを我々に教えて呉れるのであった。（T.N記）